

英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察（承前）

—翻訳から見る第十二巻の存在—

牧 義 之

（名古屋大学大学院文学研究科）

本稿は、「北の文庫」第42号所収の拙稿「英訳モーパッサン短篇集「食後叢書」に関する考察—新出第十二巻本をめぐって—」（以下、前稿）の続きをなすものである。

1 第十二巻類似本の謎

前稿では、小樽商科大学付属図書館の新出資料について主に触れたが、その後の調査から明らかになったことをまず報告したい。

前稿3頁に新出第十二巻の目次を掲載した。これを見ると、この本の一番目に収められている作品は「THE PEDLAR」（行商人）である。前稿の執筆時には気が付かなかったことであるが、「食後叢書」とは別の英訳モーパッサン短篇集に『The Pedlar And Other Stories』というものがある。この本について、山川篤氏¹は国会図書館蔵本からは表紙の色や訳者が確かめられないとした上で「『ジ・アフター・ディナー』十一冊と照合することで、これらの短篇は「ジ・アフター・ディナー」から脱落したものを集めたものであることが分かる」としている。この山川氏の指摘から、山本昌一氏²は、ご本人が所蔵する『The Pedlar And Other Stories』を見て、「国会本（国会図書館蔵本—筆者注）で山川氏は紹介しておられるが、表紙も扉も欠落していて訳者の名前も確認できないとのことである。（中略）「ADS」（食後叢書を指す—筆者注）はウィットリング訳であったが、こちらはハニガンであり、ADSという総称もない。判型は「ADS」の小型の方のサイズで表紙は薄桃色である。」と情報の補足をされている。『The Pedlar And Other Stories』について触れている論文は、管見に触れた限りでは以上の二つであった。

筆者もこの『The Pedlar And Other Stories』について、国会図書館以外に所蔵があるかどうか調査したところ、大阪外国語大学附属図書館、山形大学附属図書館、それに早稲田大学中央図書館³がそれぞれ所蔵していることが分かった。この内、山形大学本は、再製本がなされていない、原型を留めているものである。表紙の色について山本氏は「薄桃色」と書いているが、山形大学本は薄茶色であった。これは、本来の色が時間を経て褪せたことによるのかも知れない。大きさについては、指摘の通り「食後叢書」よりも本のサイズも活字のサイズも小さい。また、早稲田大学本は再製本されているが、標題紙に「明治四十年八月廿五（？

五の書き方が曖昧で判別し難い) 日購求」の印が押されている。

「食後叢書」と同じく、出版年の記載が無いので詳細は不明だが、早稲田大学本の購求印の日付から推測すれば、「食後叢書」が出版された明治 29 (1896) 年から数年以上経て『The Pedlar And Other Stories』は出版されたのだろう。

さて、この『The Pedlar And Other Stories』は、その収録作品と収録順序が「食後叢書」第十二巻と全く同じ本なのである。山本氏の指摘の通り、これが「食後叢書」であるという表記は一切ないが、出版社・翻訳者とも「食後叢書」第十二巻と同じであった。ただ異なるのは、本のサイズ・活字のサイズが「食後叢書」第十二巻よりも小さいことと、活字の組み方が異なっていること。目次を見ると、それぞれの頁数は同じだが、ある頁の最後にくる単語が異なるなど、本文にわずかな差異が認められる。

果たして、この『The Pedlar And Other Stories』は、「食後叢書」第十二巻よりも以前に出版されたものか、それとも以後にタイトルを変えて出版された本か、それを断定できるような資料は今のところ発見出来ていない。類似本という、また新たな謎が生まれてしまったが、ひとまずこの問題は後回しにして、本稿では主に、前稿からの課題となっていた、作品の翻訳について述べたい。

また、前稿以降の調査で、新たに「食後叢書」の所蔵が明らかになったところがある⁵。このうち、花園大学情報センターの蔵本に第十二巻が含まれていて、表紙は大阪大学附属図書館蔵の第二巻のように、物語の中のワンシーンを描いた絵が印刷されている。第十二巻の表紙絵は、「A WARNING NOTE」(邦題では「警戒警報」とされる作品)のワンシーンである。「食後叢書」の表紙絵については、ほとんど確認されていないが、花園大学の蔵書にはこの他にも絵付き表紙のものが複数確認されるので、これは稿を改めて論じたい。また、同じく花園大学蔵の第十一巻の目次については後に触れる。

2 当時の翻訳に第十二巻は使用されたのか

「食後叢書」第十二巻の存在を確かめるために、これを底本に用いた翻訳があるかどうかを検討する。当時、モーパッサンの作品を翻訳するための底本としては、「食後叢書」と全十七巻のダンスタン版「モーパッサン全集」(以下、ダンスタン版とする)とがある。前稿では第十二巻に収録されている作品から「AFTER」「A DUEL」「THE FARMER'S WIFE」⁶を挙げておいた。これらは明治 37、8 年に翻訳された作品で、「ダンスタン版」が出版された明治 36 (1903) 年から間が無いので、底本に「食後叢書」第十二巻が使用された可能性が高いと考えられたからである。以下、三つの作品について、順を追ってそれぞれの底本を見極めていく。

(1) 「AFTER」

正宗白鳥が明治 37 年 10 月 30 日の「讀賣新聞」に「夜寒」という題で訳出している。翻訳にあたり、例えば本来は 3 人登場するはずの子供が 2 人になってい

たりするなど、白鳥はかなり手を入れているように見える。「食後叢書」第十二巻とダンスタン版との本文の異同は、約 50 箇所ある⁷。その内、翻訳に関わる文章を五つ抜き出して見てみる。以下、「食後叢書」第十二巻を（食）、ダンスタン版を（ダ）、翻訳を（翻）とし、異同に関わる部分に下線を引く。翻訳文については、初出から引用した⁸。

- （食）The Abbe Mauduit rose up and advanced towards the fire, then drew towards the flames the big shoes such as country priests generally wear.
- （ダ）The Abbe Mauduit rose up and drew near to the fire, stretching out to the flames the big shoes that country priests generally wear.
- （翻）牧師ハ椅子を暖爐の方に引寄せて、田舎牧師のよく履いて居る例の靴を履いた足元へ火塊を散かして、

「暖炉の方に引寄せて」という部分は、「drew near to the fire」（ダ）よりも「advanced towards the fire」（食）の方が近い。「near」と「towards」の違いだが、「near」では「暖炉の近くに」となるだろう。

- （食）Everything that touched it produced in it twitchings of plan, frightful vibrations, and, consequently, true ravages.
- （ダ）Everything that touched it produced in it twitchings of plan, frightful vibrations, and veritable ravages.
- （翻）觸れる物毎に酷く苦痛を感じて戦慄上る、それが爲に病氣を惹起すといふ譯で。

「それが爲に」は、「consequently」（食）から訳された言葉で、「veritable」（ダ）からは引き出されないものである。

- （食）Happy are the men whom nature has buttressed with indifference and armed with stoicism.
- （ダ）Happy are the men whom nature has buttressed with indifference and cased in stoicism.
- （翻）『實に性冷靜にして、ストイツク學徒（苦樂を意を介せざる人）の風を粧ふものハ幸ひなるかな』です。

「の風を粧ふ」が、「armed with」（食）か、「cased in」（ダ）のどちらかから引き出された言葉かは見極めにくいだが、「箱に入れる、覆いをかぶせる」の「cased in」よりも、「武装させる」という意味がある「armed with」の方が近いだろう。

(食) At last, he was within reach of my hands, and I gently caressed him with the most careful touch.

(ダ) At last, he was within reach and I gently caressed him with the most careful hands.

(翻) 終にハ手の届く處まで來たので、用心しながら靜に犬の頭を叩いてやつた。

「of my hands」が抜けているダンスタン版からは「手の届く」という訳は出来ないだろう。文末の「touch」と「hands」の違いは、「叩いてやつた」に影響してくるが、「touch」の方が「叩(く)」という単語を導きやすいように思われる。

(食) Sam immediately rushed up, fell asleep on my knees, and lifted up my hand with the end of his snout so that I might caress him.

(ダ) Sam would lie on my knees, and lift up my hand with the end of his nose so that I might caress him.

(翻) 犬も走寄って來て、私の側や膝の上へ寝轉んで、鼻で私の手を上げて、愛撫を乞ふのが例でした。

ここは明確に「食後叢書」第十二巻を底本にしたことが分かる文章になっている。ダンスタン版には訳文の「走寄って來て」に該当する語が無いからである。

以上のように、「AFTER」に関しては、正宗白鳥は底本に「食後叢書」第十二巻を用いたことが、これらの異同から明確に確認することが出来る。

(2) 「A DUEL」

「A DUEL」は、「慶応義塾學報」第85号(明治37年12月15日発行)に、田中嘯月が「決闘」という題で翻訳している。「食後叢書」とダンスタン版との異同は、30箇所弱で翻訳に関わる文章は二つある。以下、「AFTER」と同様に、考察していく。

(食) And still, lolling back, he began to sneer.

(ダ) And then, lolling back, he began to sneer.

(翻) 普國士官は猶も身を反らして頻に冷罵の語を放ち、

「猶も」は、「then」よりも「still」の方から導かれたと思われる。

(食) And suddenly he pushed his boots against the thigh of M.Dubuis, who turned his eyes round, reddening to the roots of his hair.

(ダ) And suddenly he pushed his boots against the thigh of M.Dubuis,

who turned his eyes away, reddening to the roots of his hair.

(翻) 不意にジューブイの股に其長靴を突き當てければ、ジューブイは血色火の如くになりて士官の方に振り向けり。⁹

「turn round」は、「振り向く、ぐるりと回転する」という意味だが、「turn away」では「顔（視線など）をそらす」という意味になり、「振り向けり」と訳すことは出来ない。従って、ここでも底本には「食後叢書」第十二巻を用いたことが分かる。

その他に、細かい点ではあるが、底本特定のための手がかりになる部分が訳文に隠されている。それは改行のなされ方である。訳文が「食後叢書」第十二巻と同じように改行を行っている箇所がある。

(食) "You did not want to do what I asked you?" /

M.Dubuis replied: /

"No, monsieur." /

The train had just left the station. /

The officer said: /

"I'll cut off your moustache to fill my pipe with." /

And he put out his hand towards the Frenchman's face. /

The Englishmen kept staring in the same impassive fashion and fixed glanced. /

Already the German had caught hold to (以下略)

(ダ) "You did not want to do what I asked you?" /

M.Dubuis replied: "No, Monsieur." /

The train had just left the station, when the officer said: /

"I'll cut off your mustache to fill my pipe with." /

And he put out his hand towards the Frenchman's face. /

The Englishmen kept staring in the same impassive fashion and fixed glanced. Already the German had caught hold of the moustache and (以下略)

(翻) 『君は我命を果すことを好まざるか』 /

ジューブイ /

『然り君よ』 /

此時恰も瀛車は進行を始めたり /

士官は /

『然らば我は汝の髯を切りて我パイプに詰めん』 /

と云ひ様手をジューブイの顔に差延べたり。英人は尚も氣の抜けたる目附きして之を見詰めつゝあり。 /

士官は早やジューブイの髯を捕へて (以下略)

訳文の改行と、「食後叢書」第十二巻の改行がほぼ同じであることが分かる。これらのことから、「夜寒」と同様に、この「決闘」も「食後叢書」第十二巻が底本に用いられたことが確認出来る。このように、原文（底本）の活字の並びを意識しながらの翻訳は、例えば二葉亭四迷のツルゲーネフの翻訳からつながってくるものがあると思われるが、ここでは立ち入らないことにして、今後の考察課題としたい。

（３）「THE FARMER'S WIFE」

三木天遊が「侍女」という題で、「文芸界」第４巻第６号（明治３８年５月１日発行）に掲載している。本文の異同は４０箇所弱であるが、これは「夜寒」、「決闘」とは違い、底本にダンスタン版が使われたことが明確である。以下にその根拠となる部分を示す。

（食） So on Sunday, by the railway-line running into Normandy, at the station of Alvimare, we got out, and Baron Rene, pointing out to me a country jaunting-car, harnessed to a restive house, driven by a big peasant with white hair, said to me:—

（ダ） So on Saturday we started by the railway-line running into Normandy, and alighted at the station of Alvimare. Baron Rene, pointing out to me a country jaunting-car, by a restive house, driven by a big peasant with white hair, said to me:

（翻）土曜日にルマンヂー通の鐵路に依り、アルヴィマール停車場に降れば、男爵可笑う鄙びれたる遊山車に、頑げの驛馬つけて、魁偉なる白髪の郷男の御したるを指ざし、

「食後叢書」第十二巻を底本に用いたならば、「日曜日」となるが、「土曜日」とあるので、ダンスタン版に拠っていることが分かる。他に翻訳に関わってくるような異同は無いので、「侍女」の底本にはダンスタン版が用いられたのだと結論付けられる。

以上、３作品についてその底本特定のために、「食後叢書」第十二巻とダンスタン版の異同を示した上で考察したが、結果として３作品のうち二つは底本に「食後叢書」第十二巻が使われた可能性が高く、ほぼ間違いないことが確認出来た。ここから、当時の第十二巻の流通が明らかになる。以前から、幻のように思われてきた（？）第十二巻は、確実に当時の文学者の本棚に納められ、翻訳の底本に用いられる程に流通していたのだ。

３ 「食後叢書」の出版形態と「東京の三十年」の記述

ここで、「食後叢書」シリーズの出版形態について、新たに資料から判明した

部分があるので論及したい。全十二巻のモーパッサン短篇集は、果たしてどのように刊行されてきたのか。少なくとも、一巻から十巻までと、十一、十二巻とでは翻訳者が異なるので、この間に出版の時期などの時間的な間隔がありそうなのは想像に難くない。これは前稿及び本稿の前半でも触れた通りである。では一巻から十巻まではどうだったのであろうか。

それを示す資料が早稲田大学中央図書館所蔵の「食後叢書」第七巻の巻末に付された広告である。これは、他の「食後叢書」には付されていない、珍しいものである。

広告には「A CATALOGUE OF BOOKS ISSUED BY MATHIESON & Co., LTD.,」¹⁰とあり、8頁に渡って本の紹介がなされている。ボカッチオ、フローベール、ゾラなどの本が並ぶ中、4～5頁にかけて「食後叢書」が紹介されている。今まで便宜的に、モーパッサンの短篇集を「食後叢書」と呼んでいるのであるが、「食後叢書」シリーズ自体は、モーパッサンに限ったものではなく、他にトルストイ、サフォー、ショーペンハウアーなどの著作も含まれる。この第七巻巻末の広告には、二十巻までの「食後叢書」シリーズが紹介されており、モーパッサンの短篇集は、その内の第十巻から十九巻までである。二十巻は別の作家の本になっているので、この時点でモーパッサンの短篇集としての「食後叢書」は第十巻まで出ていたことが分かる。つまり、一巻から十巻までは纏まって出版され、十一、十二巻とは時期のずれがあることになる。ここに翻訳者が異なる理由があるのだろう。

この広告の時期についてであるが、本自体に出版年の記載が無く、広告にもいつの目録か記載が無いので詳細は不明であるが、早稲田大学の購求印の日付が「明治三四年十二月十九日購求」となっていることから考えると、1901（明治34）年以前のものであろう。

以上のことから、繰り返しになるがモーパッサンの「食後叢書」について整理してみると、まず「食後叢書」シリーズの十巻から十九巻分として第一巻から第十巻が発行された。それからある程度期間をおいて、翻訳者を変えて第十一巻と第十二巻が発行された。また第十二巻に関しては同内容の本『The Pedlar And Other Stories』が存在するが、どちらが先に出版されたのか、また第十一巻と第十二巻は同時に発行されたのかどうかはまだ分からない。

これらの点を踏まえて、再び前稿で引用した田山花袋の『東京の三十年』にある「食後叢書」についての記述を見てみたい。花袋は「モウパッサンの『短篇集』が十冊か十二冊、安いセリースで出版されてある」とし、また「ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の読者であり得るといふことが、堪らなく私を得意がらせた」と当時を振り返っている。これまで全十一巻とされてきたのは間違いで、花袋の「十二冊」という記述が正しいことはこれまでに確認してきた通りである。さらにここで「十冊か十二冊」という部分に注目してみる。これは全何巻であったかが思い出せなくてあやふやな記述になったようにもみられるが、実は「食後叢書」の出版・輸入形態に即して書いたのがこうなったのではないだ

ろうか。つまり、花袋はまず丸善で、日本に初めて到着したモーパッサンの「食後叢書」を第一巻から十巻までまとめて購入した¹¹。これは『東京の三十年』の記述から推測出来る。次いで随時輸入された十一巻、十二巻と買い次いだ。当初は十巻までしか無かったので、花袋の頭には「初めに十巻分を買った記憶」と「結局十二巻まで買った記憶」とが混在していて、こういった記述になったのではなかろうかと思われるのだ。さらに、花袋が『The Pedlar And Other Stories』を知っていたとしたら、それと同じ第十二巻をシリーズに含めようかどうか迷ったから「十冊か十二冊」となった、とも想像される。いずれにしても、単に記憶違いということではなく、購入した時の様子を思い浮かべての記述でこのようになったと解したい。

4 さらに第十一巻について

第十二巻の同内容本があったことから想像すると、翻訳者が同じ第十一巻についても同内容本があるかどうか疑問になってくる。これについてはまだ発見出来ていないのであるが、一つ気になる点があるので最後にここで記しておきたい。

それは同じ第十一巻の内でも微妙な差異があることだ。鶴見大学図書館¹²斎藤文庫所蔵、及び花園大学情報センターの第十一巻と、早稲田大学中央図書館所蔵の第十一巻の両本の目次を見比べると、若干違いがあることが分かる。以下にそれぞれの目次を表に表してみた。

第十一巻収録作品名	鶴見・花園大学本頁数	早稲田大学本頁数
MAGNETISM	3	3
MOTHER AND DAUGHTER	12	12
A PASSION	19	20
NO QUARTER	34	36
THE IMPOLITE SEX	46	50
WOMEN'S WILES	56	62
A NIGHT IN SPRING	67	74
DREAMS	77	86
MOONLIGHT	84	94
THE CORSICAN BANDIT	92	104
A DEAD WOMAN'S SECRET	99	112
THE CAKE	107	122
A LIVELY FRIEND	116	132
THE SHEPHERD'S LEAP	126	144
THE ORPHAN	134	154
THE BLIND MAN	146	168
A WIFE'S CONFESSION	153	176

最後の作品に到るまでに、20 頁以上の差が発生している。この頁数の違いが、活字の組み方によるものか、それとも出版時期に関わってくるものかはよく分からない。国会図書館蔵の第十一巻は早稲田大学本の頁数と等しい。つまり、2 種類の第十一巻が存在することになる。これらの具体的な本文（活字）の異同調査は、本自体の保存状態（開くと崩れるような状態が多い）から見てなかなか難しい。掘り下げることが困難ではあるが、いずれ別の方法でこの問題を解決したいと考えている。また、「食後叢書」の出版時期及び異本等について、今後も研究を続けていくつもりであるので、ある程度纏まり次第発表したい。

- 1 山川篤『花袋・フローベール・モーパッサン』（1993 年 5 月、駿河台出版社）125 頁。
- 2 山本昌一「花袋とモーパッサン—山川篤著『花袋・フローベール・モーパッサン』へのささやかな落穂拾い—」（『日本古書通信』第 788 号、1995 年 3 月号、日本古書通信社）『The Pedlar And Other Stories』の表紙の写真も掲げられている。
- 3 前稿で書き漏らしたのでここで補うが、早稲田大学中央図書館には「食後叢書」がまとまって所蔵されている。研究書庫には再製本された第一巻から第十一巻までが、柳田文庫には再製本されていない第三巻、四巻、九巻がある。研究書庫の第七巻の巻末に付された広告については後述する。
- 4 早稲田大学中央図書館所蔵の「食後叢書」は「明治三十四年十二月十九日購求」の印が押してあるものがある。これが明治 29 年に出版されたものか、版を重ねたものかは判らないが、早稲田大学本の場合、おそらく出版から輸入そして購求までの期間は 4～5 年というところではないだろうか。
- 5 新たに確認された所蔵先と号巻は以下の通り。
 - ・花園大学 情報センター（一、二、三、四、七、八、十、十一、十二巻）
 - ・鎌倉女子大学 図書館（九巻）
 - ・岐阜大学 図書館（三巻）
 - ・新潟大学 附属図書館（五巻）
 - ・長崎大学 附属図書館 経済学部分館（四、十、十一巻）
- 6 ダンスタン版では、これらの 3 作品は全て第五巻(VOL.V SHORT STORIES OF THE TRAGEDY AND COMEDY OF LIFE)に収録されている。
- 7 異同について、ダッシュやコンマの位置など、記号の違いは、翻訳に関わるものを除いて含まない。
- 8 「A DUEL」「THE FARMER'S WIFE」の翻訳文についても同様に、引用には初出を用いた。また、それぞれの初出は総ルビだが、ルビは省いた。また明らかに誤植と思われる部分については、引用者が適宜手を入れた。
- 9 原文では「ジューブイ」に傍線あり。引用では省略した。
- 10 また「Edited by W. M. THOMSON」とある。「食後叢書」シリーズの出版

意図として、携帯用で面白く読める、全て 200 頁程の本であることが紹介されている。紙装丁とクロス装の 2 種類があったようだ。

11 花袋は「食後叢書」を購入する（「受け取って来る」）資金「七、八円の金」を用意するために「『美文作法』を書く金の中から十円前借」している。当時、洋書のまとめ買いなどで割り引き等があったかどうかについては分からないが、「七、八円の金」はおそらく十巻分に相当する金額だと思われる。

12 前稿では状態が悪いため閲覧が出来なかったと記したが、その後訪問して見せていただくことが出来た。第四巻と第十巻は再製本されているが、第十一巻は再製本されておらず、表紙も残っている貴重なものである。しかし、いずれも状態は悪く、複写に耐えなかったので、本稿の目次も閲覧時のメモを元に論じている。また、鶴見大学図書館のカード目録を見たところ、出版年について第四巻は「1896?」、第十巻は「1897?」とあり、第十一巻については未記入であった。ちなみに、第十一巻には花園大学蔵第十一巻のような表紙絵は無かった。

さらに、前稿の注 7 で国会図書館蔵第十一巻の「11th. Series and last.」という記述について「紙面等に表記がある訳ではないので、あくまで国会図書館の蔵書の最後という意味で書かれたものである」と書いたが、原表紙が残っている鶴見大学本に「ELEVENTH AND LAST SERIES.」と印刷されていたので、おそらく国会図書館本の原表紙にも同様の印字があったのではないかと思われる。

<資料>本文の異同 対照表

以下に資料として、本文中に考察したそれぞれの作品について、ダンスタン版と食後叢書の英訳の異同を一覧にして示す。表の右端のアルファベットは、異同を細かく分類するための記号である。Aは「語の置き換え」、Bは「語の挿入」、Cは「綴り違い」、Dは「語順の違い」、補は「!や?などの違い」である。複数の部類に関わるものについては「aB」などのように記し、性質の弱い方を小文字にした。つまり、「AFTER」の三つ目の異同は、「語の置き換え」と「語の挿入」の両方が含まれ、「語の挿入」の方が強い(said→come to say)ことを示す。これらについては、筆者が独断で分類したものなので、多少不確かな部分もあるかも知れないが、これだけ両英訳の間に異同があることもお分かりいただけると思う。

また、表左端の星印は、本文中で取りあげた異同である。

「AFTER」(表左端ページ数はダンスタン版。以下の作品も同じ。)

	ダンスタン版	食後叢書	
P.175	"MY DARKLINGS," said the <u>Comtesse</u> ,	"MY DARKLINGS," said the <u>Comtess</u> ,	C
	rose up to <u>kiss</u> their grand-mother	rose up <u>and</u> kiss their grand-mother	A
	Then they <u>said</u>	Then they <u>come to say</u>	aB
	The Abbe Mauduit <u>sat</u> two of the young ones on his knees,	The Abbe Mauduit <u>put</u> two of the young ones <u>sitting</u> on his knees,	A B
	drawing their heads <u>toward</u> him	drawing their heads <u>towards</u> him	C
	he again set them down on the <u>floor</u>	he again set them down on the <u>ground</u>	A
	and the little <u>beings</u> went off	and the little <u>being</u> went off	C
	said the <u>Comtesse</u>	said the <u>Comtess</u>	C
	raised her bright eyes <u>toward</u> the priest	raised her bright eyes <u>towards</u> the priest	C
P.176	natural path of <u>marriage</u> and the family	natural path of <u>marriages</u> and the family	C
☆	The Abbe Mauduit rose up and <u>drew near to</u> the fire, <u>stretching out to</u> the flames the big shoes <u>that</u> country priests generally wear.	The Abbe Mauduit rose up and <u>advanced towards</u> the fire, <u>then drew towards</u> the flames the big shoes <u>such as</u> country priests generally wear.	A A A
	and for the last twenty years	and for the last twenty years <u>he</u>	B

	had been	had been	
P.177	deaths of her son and her <u>daughter-in-law</u>	deaths of her son and her <u>son-in-law</u>	A
	<u>The abbe</u> came every Thursday	<u>He</u> came every Thursday	A
	and have had many proofs since that I made no mistake on <u>that</u> point	and <u>I</u> have had many proofs since that I <u>had</u> made no mistake on <u>the</u> point	BB A
	Young people <u>often have</u> hearts	Young people <u>have often</u> hearts	D
P.178	one ought to <u>realize</u> the fact	one ought to <u>have regard to</u> the fact	A
	the time of almost complete development	the time of <u>their</u> almost complete development	B
☆	Dose anyone <u>realize</u> the fact	Dose anyone <u>render an exact account to himself of</u> the fact	A
	so lively that <u>my</u> soul resembled a living wound	so lively that soul resembled a living wound	B
☆	Everything that touched it produced in it twitchings of pain, frightful vibrations, and <u>veritable</u> ravages.	Everything that touched it produced in it twitchings of pain, frightful vibrations, and, <u>consequently, true</u> ravages.	A
☆	Happy are the men whom nature has buttressed with indifference and <u>cased in</u> stoicism.	Happy are the men whom nature has buttressed with indifference and <u>armed with</u> stoicism.	A
	<u>I was afraid</u>	<u>I did not feel enough of boldness</u>	A
P.179	in which I <u>should</u> be	in which I <u>would</u> be	A
	<u>Suddenly</u> a very simple event made me see cleary into myself,	A very simple event made me see cleary, <u>all of a sudden</u> into myself,	ad
	so much regretted, so much desired.	so much regretted, <u>and</u> so much desired.	B
	with eternal uneasiness.	with <u>my</u> eternal uneasiness.	B
	after a long walk, as I was	after a long walk, <u>I saw</u> , as I was	B
	with <u>quick</u> strides	with <u>great</u> strides	A
	not to be late, <u>I met</u> a dog trotting <u>toward</u> me	not to be late, a dog trotting <u>towards</u> me	B C
P.180	At last, he was within reach	At last, he was within reach <u>of</u>	B

☆	and I gently caressed him with the most careful <u>hands</u> .	<u>my hands</u> , and I gently caressed him with the most careful <u>touch</u> .	A
	in spite of the <u>objections</u> of my parents,	in spite of the <u>opposition</u> of my parents,	A
	and followed me	and <u>he</u> followed me	B
☆	Sam <u>would lie on my knees</u> , and lift up my hand with the end of his <u>nose</u> so that I might caress him.	Sam <u>immediately rushed up, fell asleep on my knees</u> , and lifted up my hand with the end of his <u>snout</u> so that I might caress him.	A C A
	One day toward the end of June	One day towards the end of June	C
	at a gallop. <u>It had a</u> yellow box-seat,	at a gallop, <u>with its</u> yellow box-seat,	A
P.181	two big <u>jolts</u> and behind it	two big <u>shakes</u> , and behind it	A
	and spurts of blood <u>fell</u> to the ground.	and <u>fell in</u> spurts of blood to the ground.	ad
P.182	misery tortures me, ravages me.	misery tortures me, ravages me!	補
	<u>The</u> sorrows which I have every day	<u>These</u> sorrows which I have every day	A
	if they fell on my <u>own</u> heart.	if they fell on my heart.	B
	preserved such <u>a deep</u> and	preserved such <u>an obscure</u> and	A
	<u>revealed</u> by the reflection of the lamp,	<u>lit up</u> by the reflection of the lamp,	A
	Then she came back, sat down before the fire, and pondered over many things on which we never think when we are young.	Then she came back <u>and</u> sat down before the fire, and <u>she</u> pondered over many things on which we never think when we are young.	B B

「A DUEL」

	ダンスタン版 (米)	食後叢書 (英)	
P.1	at the ravaged fields and <u>burned</u> hamlets.	at the ravaged fields and <u>burnt</u> hamlets.	C
P.2	had not diminished <u>the</u> big paunch,	had not diminished his <u>big</u> paunch,	A
	at the savagery of <u>men</u> .	at the savagery of <u>man</u> .	C
	a kind of fever of <u>impotent</u>	a kind of fever of <u>impudent</u>	A

	patriotism	patriotism	
	They were both <u>stout also</u> ,	They were both <u>also stout</u> ,	D
	something referring to their guidebook,	something referring to the guidebook,	A
	with a great clatter of his <u>saber</u>	with a great clatter of his <u>sabre</u>	C
	and his long mustache <u>and beard</u> , of a paler <u>color</u> .	and his long mustache, of a paler <u>colour</u> .	B C
P.3	and lolling <u>backward</u> :	and lolling <u>backwards</u> .	C
	And he glanced <u>toward</u> M.Dubuis,	And he glanced <u>towards</u> M.Dubuis,	C
	burn everything, <u>and</u> kill everybody.	burn everything, kill everybody.	B
P.4 ☆	And <u>then</u> , lolling back,	And <u>still</u> , lolling back,	A
	He announced that <u>Bismarck</u> was going to	He announced that was going to	B
	with the captured <u>cannons</u> .	with the captured <u>cannon</u> .	C
☆	who turned his eyes <u>away</u> ,	who turned his eyes <u>round</u> ,	A
P.5	The train had just left the station, <u>when</u> the officer said:	The train had just left the station. The officer said:	B
	I'll cut off your <u>mustache</u> to fill my pipe with.	I'll cut off your <u>moustache</u> to fill my pipe with.	C
	put out his hand <u>toward</u> the Frenchman's face.	put out his hand <u>towards</u> the Frenchman's face.	C
P.6	tried to draw his <u>saber</u> ,	tried to draw his <u>sabre</u> ,	C
P.7	" <u>Oh</u> ! Yes."	" <u>Ah</u> ! Yes."	A
	They made him stand twenty paces away from his <u>enemy</u> .	They made him stand twenty paces away from his <u>adversary</u> .	A
	and hurried him in double-quick time <u>toward</u> the station,	and hurried him in double-quick time <u>towards</u> the station,	C
	"One! two! one! two!"	"One! two; one two!"	補
P.8	Then gravely, one after the other, they stretched out <u>their</u> right <u>hands</u> to M.Dubuis, and <u>then</u> went back and sat in their <u>own</u> corner.	Then gravely, one after the other, they stretched out <u>the</u> right <u>hand</u> to M.Dubuis, and <u>they</u> went back and sat in their corner.	A C A B

「THE FARMAR'S WIFE」

	ダンスタン版 (米)	食後叢書 (英)	
P.15	<u>One day</u> Baron Rene du Treilles said to me:	Baron Rene du Treilles said to me:	B
	By doing so, my dear fellow, <u>you will</u> give me	<u>You will</u> , by doing so, my dear fellow, give me	D
	I accepted <u>his</u> invention.	I accepted <u>this</u> invention.	A
☆	So on <u>Saturday we started</u> by the railway-line running into Normandy, <u>and alighted</u> at the station of Alvimare. Baron Rene, pointing out to me a country jaunting-car drawn <u>by</u> a restive horse, driven by a big peasant with white hair, said to me:	So on <u>Sunday</u> , by the railway-line running into Normandy, at the station of Alvimare, <u>we got out</u> , <u>and</u> Baron Rene, pointing out to me a country jaunting-car, <u>harnessed to</u> a restive horse, driven by a big peasant with white hair, said to me:	A B B A
P.16	The young horse,	<u>And</u> the young horse,	B
	Every fall backward <u>on to</u> the wooden bench	Every fall backward <u>in</u> the wooden bench	A
☆	stood erect and sniffed the air on the plains <u>as if they could</u> smell the game.	stood erect and sniffed the air on the plains, <u>from which emanated</u> smell the game.	A
	undulating and melancholy <u>as</u> an immense English pak, <u>with</u> farmyards surrounded by	undulating and melancholy, <u>like</u> an immense English pak, <u>where</u> <u>the</u> farmyards, surrounded by	A A
	which artistic gardeners <u>provide</u> for when they are tracing the lines of princely estates.	which artistic gardeners <u>look out</u> for when they are tracing the lines of princely estates.	A
P.17	Within, <u>you inhaled</u> the odor of milk,	Within, <u>one felt</u> the odor of milk,	A
	-the odor of the soil, of the walls, of furniture, of stale soup, of washing,	-the odor of the soil, of the walls, of furniture, <u>the odor</u> of stale soup, of washing,	B
	In this farmyard the smell of apples was	In this farmyard the <u>Norman</u> smell of apples was	B
P.18	I noticed the special kind of friendly familiarity between the Baron and the peasant <u>which</u>	I noticed the special kind of friendly familiarity <u>which had struck me from the start</u> between	D

	<u>had struck me from the start.</u>	the Baron and the peasant.	
	Here is the story:	<u>Well</u> , here is the story:	B
	We lived <u>then</u> in our old chateau of Valrenne,	We lived <u>there</u> in our old chateau of Valrenne,	A
P.19	entices and debauches them –foolish lassies– <u>till now</u> we have only the scum of the female sex for servantmaids,	entices and debauches them – <u>these</u> foolish lassies– <u>and</u> we have <u>now</u> only the scum of the female sex for servantmaids,	B A B
	“Now it happened that my <u>father’s</u> man-servant,	“Now it happened that my man-servant,	B
	“My father was incessantly <u>saying</u> :	“My father was incessantly <u>repeating</u> :	A
	Are you unwell?”	Are you unwell?” <u>He replied:---</u>	B
P.21	“So Louise was sent for, and questioned by my mother. She said in reply that	“So Louise was sent for, and questioned by my mother; <u>and</u> she said in reply that	B
	But my father and <u>my</u> mother died, too,	But my father and mother died, too,	B
P.22	“Ha! And what was it about?”	“Ha..... And what was it about?”	補
	she changed so that you wouldn’t know her <u>at the end of six months – no, you wouldn’t know her</u> , M’sieu l’Baron.	she changed so that you wouldn’t know her, M’sieu le Baron.	B
P.23	I bought <u>her</u> caps and dresses	I bought caps and dresses	B
	the whole day without stirring out of <u>the</u> bed,	the whole day without stirring out of bed,	B
	Then, she asked <u>him</u> to let me come	Then, she asked to let me come	B
	I owe it to you, <u>Jean</u> .	I owe it to you.	B
	I wish you’d tell <u>it to</u> him some day,	I wish you’d tell him some day,	B
	-swear it in the presence of M’sieu le Cure!	-swear itin the presence of M’sieu le Cure!	補
P.24	“Since then, I <u>have been coming</u> here every year.	“Since then, I <u>come</u> here every year.	A